

中斎塾 北関東フォーラム 第11回講話

令和7年12月20日（土）

お早う御座居ます。今井副理事長のご挨拶。川村さんへの默祷を捧げて戴き、皆様有難う御座りました。

今回、私は川村さんの通夜、告別式に出席することが出来ませんでした。出席出来ないと分かったので、事前にお別れをしたいとお願いし、ご自宅へ伺いました。手を合わせると、川村さんは大変穏やかな、まるで眠っておられるかのようなお顔をしており、最後のお別れをさせて戴きました。

亡くなった川村さん、そして創業者の川村さんことを思い返しますと、私がシムックスを創業した当時の事が思い出されます。資本金100万円、出来たばかりの会社であることを承知で、五分五分で対等にお付き合いしようと、創業者の川村さんが言って下さったことを覚えています。

そのご縁が引き継がれ、今回川村さんが亡くなられ、手を合わせた際、創業の頃が自然と心に浮かびました。そこからバトンタッチされ、小板橋さんへと続していく流れの中で、一人の人が生まれ、そして亡くなるまでの一生というものは、様々な糸が織りなす人生なのだと、改めて感じました。

穏やかで良い表情の川村さんとお別れ出来たこと、本当に良かったと思っております。川村さんについては以上でございます。なお、「知足」にも掲載させて戴きましたこと、ここでお伝えします。

今井さんが開会挨拶の中でご自身の病気にも触れておられました。人はいつ、どのような形で入院や手術が必要になるかは誰にも分かりません。今井さんは手術が順調に進んだとの事、本当に良かったと思っております。来年は生き生きと元気に活躍したいというお話もあり、私としても大変嬉しく、安心致しました。来年は、そのように進んで戴ければと思います。

本日の論語に参ります。素読から始めて参りましょう。私が読みますので、後について、ご一緒にお願い致します。

(全員で素読)

① 子張 行われんことを問う。子曰く、言忠信に、行篤敬ならば、蛮貊の邦と雖も行われん。言忠信ならず、行篤敬ならずんば、州里と雖も行われんや。立てば則ち其の前に参るを見、輿に在れば則ち其の衡に倚るを見る。夫れ然る後行われんと。子張諸れを紳に書す。

(衛靈公第十五・5)

② 多く見て殆きを覗き、慎みて其の余を行えば、則ち悔寡し。言尤寡く、行悔寡ければ、祿其の中に在りと。

(為政第二・18)

③ 子曰く、君子は言に訥にして、行に敏ならんことを欲す。

(里仁第四・24)

ここでは、子張について語られている話が二つ、①と②はいずれも子張と孔子とのやり取りです。

子張は、体格が良く、押し出しも強く、話も達者で、なるほどと思わせるものがある。一見すると素晴らしい人物であり、佐久間象山のようなイメージです。威風堂々として、難しい課題に直面すれば、それに取り組もうとする氣概も十分に持っていますが、言行の一致という点において、やや難がある人物でした。

孔子からみれば、子張は48歳年下です。私は現在78歳ですので、30歳の人間とのやり取りに相当します。皆様もご自身の年齢から48歳引いて考えて戴ければ良いと思います。

孔子から見れば、どうしても欠点があちらこちら目につきます。欠点を正してやらねばならないと考え、孔子から子張へ具体的な助言を与えていたのが①の内容です。

一方、②における子張は、世に出る直前の人物であり、孔子のもとで学び孔子塾を卒立った後、どこかの国で相当な地位、一気に宰相は無理だとしても、大臣クラスで迎えられるような職に就きたい、という思いを明確にしています。子張

は、自らの胸中を隠すことなく、高給で召し抱えてもらうには、何が必要なのか、率直に孔子へ尋ねている訳です。

孔子は、最初から高給で召し抱えてくれる所を紹介して欲しいと言わんばかりの、あからさまな姿勢は好ましくないと考えます。この人物をぜひ高給で迎えたいと相手に思わせるにはどうすればよいのか。孔子は懇切丁寧に教えています。

「子張、行われんことを問う」

①は、すでに官に召し抱えられ、高級官僚として職に就いている状態です。高級官僚ともなれば、国民に対して施策を示し、部下に対しても様々な指示を出します。自分なりに構想を練り、それを実行に移そうとしますが、現実の世の中は必ずしも自分の思い描いた通りに動いてはくれません。

そこで子張は、自分の考えが世の中で実現されない。どうすれば人々に受け入れられ、物事が円滑に行われるのか、孔子に答えを求めました。

これを現代で言うなら、高級官僚の段階を飛び越えて、いきなり内閣総理大臣が孔子に尋ねることになりますが、高市早苗さんを例に挙げて、話を進めてみましょう。

高市氏は、内閣総理大臣就任時に働いて働いてと発言しました。私はこの言葉を『知足』の中で引用しました。その際、「働いて・働いて・働いて・働いて、働いて参ります」と致しました。

この点について、後日、確認が入りました。中斎塾フォーラムの佐藤さんが知足の編集を担当しています。佐藤さんが私に確認しました。内容は、「各新聞を確認すると、いずれも点が一切入っておらず、働いて働いて働いて働いてまいりますと、漢字とひらがなが続くだけの表記になっています。塾長は点を打っていますが、新聞と合わせるのか、合わせないのか、はっきりして欲しいという事でした。

私は、新聞の表記の方が誤っていると判断致しました。新聞の書き方は適切ではない。従って私は、「働いて・働いて・働いて・働いて、働いてまいります」このように表現してほしいと依頼し、掲載しました。結果『知足』は、一般の新聞とは異なる表現になっています。

表記に拘ったのは、語氣が異なるからです。新聞の表記ですと、「働いて働いて働いて働いて働いてまいります」となっていますが、私は本人の言葉を聞き、新聞のような表現をしてはならないと感じました。

新聞は、原稿を書いた人、校正を行う人、最終的に掲載を決定する人と、幾重もの段階を経て出来上がる為、その過程において、中身が変化してしまうことがあります。

今回、高市早苗さんの「働いてまいります」を文章表現するにあたり、新聞の書き方が劣化しているのだと私は受け止めました。

高市早苗さんが孔子に対し、私の考えている事が世の中で思った通りに進まないのはなぜでしょうか、と問いかけている構図として読むことができ、なかなか面白い読み方になります。

それに対して孔子が答えた言葉が、次の一節です。

「言 忠信に、行 篤敬ならば、蛮貊の邦と雖も行われん。」

ここで目に留まる「蛮貊の邦」とは野蛮な国、言葉も通じず礼儀作法も異なる国です。そのような人々であっても、高市早苗さんの言葉が誠実で真心がこもり、行いが実直で慎み深いと感じれば、信頼を得られるという意味です。

この蛮貊の邦とは何処を指しているのか、明確にするならば、私は頭の中で習近平氏の国を思い浮かべます。習近平さんは、中華帝国の再興を目指し、周辺諸国に対して、言葉と態度で圧力をかけ、資金を貸し付け、返済できなければ、その国の重要なものを一時的に預かるという形で支配下に置こうとしています。こうした振る舞いこそ、まさに「蛮貊の邦」と呼ぶべきだと思います。

中国を「蛮貊の邦」として読み進めていくと、孔子の言葉が現代に重なって見えてきます。国会でのやり取りで、高市早苗さんは、岡田克也さんの質問に誘導される形で、やや具体的な所まで踏み込み過ぎてしまった。結果、相手が揚げ足を取ろうとしていた矢先、まさにその機会を与えてしまいました。

実際、中国は日本に対し、高市早苗さんが総理大臣に就任した際、通常であれば送るはずの祝意電報を送っていません。おめでとうございます、良かったですね、という態度を取らなかったのです。これは、何を言い出すか分からない人物だから注意して見ている、という暗黙のメッセージであったとも受け取れます。

そのように虎視眈々と発言を注視し、何か揚げ足を取れる材料はないかと、常に神経を尖らせていたところ、中国の問題に首を突っ込んだと受け取れる表現が出てきた。これは責め立てる材料になる、と判断したのでしょう。これで日本がとんでもない発言をした、と世界に向けて発信できる。内心では、狙い通りミスしたなど、喜んだのではないかと想像致します。

こうした見方をしますと、岡田克也さんは中国と何か繋がりがあるのではないか、と勘織る人が出てくるのも無理からぬところです。そこまで意図的に動いていたとは思いませんが、虎視眈々と狙われている状況の中で、相手の思惑にぴたりとはまる言葉が出来てしまった。結果、得たりや応と日本に対する攻撃が一氣に始まった、と捉えています。

国会で高市早苗さんが発言される際には、何よりも誠実で、真心がこもっていると受け取られる話しが方が大切になります。その点について、高市さんは意識して笑顔を作り、相当気を配っているように見えます。誠実で真心が感じられること、この表現の一つとして、笑顔を見せることを意識されたのでしょうか。

内閣総理大臣に決まった時には、それまでの硬い表情が消え、満面の笑みで感謝の言葉を述べておられました。その後はやや引きつった緊張感のある笑顔もありましたが、自然な笑顔を作るのは簡単なことではありません。鏡の前で何度も確認しながら、相当な努力を重ねられたのかもしれません。腹の内はともかく、少なくとも見た人に感じの良い人だと思わせる表情を、一貫して心がけておられます。

孔子は、徳は実直であり、素朴で、なおかつ言葉遣いや態度の全てに慎み深さがにじみ出ている、そうした印象を与える行いが必要だと言っています。

これはあくまで架空の話ですが、孔子が高市早苗さんに向かって、「笑顔はまづまず良いですが、日々の振る舞いや動き方も大切です。歩き方を少し練習すると良いでしょう」と助言している、そんな場面が思い浮かびます。

最近高市さんが行っている施策についても、その中身を見て、国民のために慎み深く実直に、言うべき事、やるべき事をきちんと行っていれば、中国のような国でも信用されるでしょう。孔子ならそう助言するだろうと、現代風に置き換え

て考えました。

「言 忠信ならず」

これは逆に言葉遣いに真心がなく、約束を次々と破るような状態を指しています。

「行 篤敬ならずんば、」

行いもひどく、見るからにいい加減だと受け取られること。

「州里と雖も行われんや」

州里とは故郷のことです。少し飛躍した解釈になりますが、例え総理大臣であっても、真心がなく、約束を破り、いい加減な行動ばかりしていると、出身地である奈良県の人々からさえ支持されなくなる、という意味に置き換えられるでしょう。州里とは郷里を指し、論語的には「里」は25軒、「州」は2500軒程の集まりを意味するとされています。

「立てば則ち其の前に参るを見、輿に在れば則ち其の衡に倚るを見る」

真心を持って立ち上がり、約束を守る人物であれば、その姿勢に共感した人々が自然と前に集まり、一体となって支えるようになる、ということだと考えられます。

単に立つだけでなく、馬車に乗ってそれを操り、動かす。ここでいう衡（こう）とは、馬と馬車をつなぐ軛（くびき）や横木を指します。馬車を操る際には、馭者が不安定にならないよう、その横木に体をしっかり寄せ、支えながら進む姿勢が大切です。

体を無理に固定するのではなく、横木に自然に寄りかかり、姿勢を安定させて馬車を走らせる。そうすると、まっすぐきれいに立ったまま操ることができ、立ち姿もすっきりします。

「それ然る後、行われんと」

そのようにして馬車を進めていけば、物事は滞りなく、思い通りに進んでいくということです。猫背になったり、体をねじったりせず、姿勢も気持ちもまっす

ぐ前を向いて進めば、物事は順調に進みます。多少のやっかみや雑音は氣にせず進みなさい、というアドバイスです。

「子張 諸れを紳に書す。」

子張はこの話を忘れないよう、幅の広い帯である「紳」に書き留めました。弟子たちは、孔子の重要な言葉をこのように帯に記し、それが後に『論語』としてまとめられた、そう理解して戴ければと思います。少し長くなりましたが、①は以上です。

②多く見て殆きを闕き、慎みて其の余を行えば、則ち悔寡し。言尤寡く、行悔寡ければ、祿其の中に在りと。 (為政第二・18)

「多く見て殆きを闕き、慎みて其の余を行えば、則ち悔寡し。」

子張がどうすれば高給取りになれますか、と孔子に尋ねたことへの答えです。孔子はまず、できるだけ多くのものを見聞きしなさい。ただし、その中でこれはおかしいと感じたものは、心の中で切り捨てなさいと言っています。良いもの、世の中の役に立つと思われる情報を中心に集め、疑問を感じるものは取り入れない姿勢が大切です。その上で残った大切な事を、慎重に、誠実な言葉遣いと真心をもって実行していけば、後悔することは少なくなる、という意味です。

言葉においても行いにおいても、咎めや後悔が少なければ、結果として俸祿、つまり評価や報酬は自然とついてくる。

「言尤寡く、行悔寡ければ、祿其の中に在りと。」

他人から咎められることが殆ど無くなる、という意味です。全くゼロにならずとも、非常に少なくなります。自分自身でも失敗したと後悔することが少なくなっています。

そのような姿勢で物事を進めていけば、結果として評価され、自然と給料も上がっていくものだと言っている訳です。

③子曰く、君子は言に訥にして、行に敏ならんことを欲す。（里仁第四・24）

これは子張に向けたものではなく、弟子全体に向けた教えです。孔子は言います。君子、すなわち立派な人やリーダーを目指すなら、口は軽々しく開かず、よく考えてから慎重に発言すべきだ、と。

「言に訥にして」

訥とは口ごもる。慎重に言葉を選ぶことです。もごもごしているように見えるかもしれません、それで構わない。君子を目指す人は、軽々しく発言せず、考えた上で言葉を出すことが大切です。

「行に敏ならんことを欲す」

口は軽々しく話さないけれど、行動は素早くありなさいという意味です。

世の中で大事なことは、大衆の動きをそのまま信じ過ぎない事です。流れの中で、多くの人が一斉に右へ進んでいる時、真実は左側にあることが多い、という考え方があります。

言い方を少し変えて説明します。高市早苗さんが総理大臣になったあと、減税や補助金に関する政策が並び、それに対して大衆が素晴らしい、と拍手喝采で迎えるような場面があったとします。そういう時こそ、少し立ち止まって首をかしげて考えた方がよい、というのが、いわゆる有識者のものの見方です。

大衆が一斉に良いと評価するもの、あるいは一部の大衆が強く支持するものは、時間が経って振り返ってみると、本質的には正反対という結果になることが少なくありません。

これで論語の素読に関する解説はいったん一区切りに致しますが、高市早苗さんが現在進めている政策について、私が感じたことを少しお話したいと思います。

日銀が金利を 0.25% 引き上げ、0.75% にしましたが、これは出来レースのように感じました。高市早苗さんと日銀総裁は、利上げを行う前に、すでに相談や話し合いをしていることがニュースでも報じられていました。総理大臣に就任して意外と早い時期に、日銀総裁と会っています。

利上げする話があり、それに対し高市さんが了承する。そうしたやり取りがなければ、今回の利上げは出来なかった筈です。

では、金利を上げることは、国民にとってどのような影響があるのでしょうか。借金している人達は、利上げにより利息を多く支払わなければならなくなります。

高市早苗さんの立場から見れば、総理大臣就任直後の利上げは評価を下げかねない判断です。しかし日銀総裁は、長期的に見て今必要な措置だと主張しました。その説明を受け、高市さんはやむを得ないと判断したのだと思います。

為替の問題もあります。ついこの間まで1ドル155円だったものが156円になり、今回の対応を受けて157円になりました。このように、為替相場にも即座に影響が出ています。同じ政策でも、やって良かったと思う人と、やらない方が良かったと思う人が必ずいます。そのバランスを見ながら、今回は日銀総裁の意見を聞いた方が良いと判断をしたのだと感じています。

金利一つを取っても、こうした側面があります。医療費についても、診療報酬を引き上げることを承認し、値上げを決めました。病院にかかる人は、支払う医療費が上がるということです。

医療機関側から見ると、真偽ははっきりしませんが、医療機関の約6割が赤字という話もあります。これがどこまで本当なのかは分かりません。何割赤字で、何割黒字とは、数字の取り方次第で変わるものです。ただ、メディアではおおむねそのように報じていますので、医療機関側としては、収入が増えるのは有難い、倒産せずに済む、という受け止め方になります。

医療費を支払う側は困ったと感じ、医療機関側は助かったと感じる。一つの政策を見ても、良い面と悪い面が必ず混ざり合っています。どんな政策でも、賛成と反対、良い点と悪い点の両方があるので、結局はそのバランスをどう取るか、ということです。

恒例の質問

恒例の質問に参ります。一年間を振り返ってみて、主観でいきましょう。

○良い日が続いたなと思う方

○嘘はつかなかつたし、嘘をつかれてもいないと思う方

○有難うと言い、有難うと言われることが多かった方

○身体の手入れをよくやっていると思う方

○自分磨きもよくやっていると思う方

○昨晩寝る時、「今日は、良い日だった。満足したな」と思って寝た方

恒例の質問につきましては、客観的に答えた方が良いのではないかとお考えになる方もおられるかもしれません。しかし、この質問は、良かったというお返事をしてもらう為の、誘導尋問のようなものです。良かったと思う為にはどうしたら良いかを考えて戴く、そういう趣旨の質問です。ですから、あくまでも主觀でお答え下さい。

判断の三原則

論語素読を今の時代に置き換えて考えること、そして判断の三原則、これらを踏まえた上で、高市早苗さんの話の続きを進めて参ります。

先程、医療費改定のところまでお話をしました。近隣の問題や医師の立場といった話を踏まえつつ、個人や企業の視点から税制に関する様々な施策を見ていくと、私の印象では姑息なことをするなど感じてしまいました。

例えば、設備投資に対して法人税の7%を差し引く、あるいは減価償却を即時償却できるといった制度は、確かに悪いことではありません。ただ、どこか小手先の対応のようにも見えます。また、個人の年収の壁についても、国民民主党に配慮して178万円の壁をそのまま受け入れたように感じられました。さらに、日本維新の会の主張を丸呑みすれば定数削減につながり、そうした進め方に対して他の野党が反発するのも、ある意味当然だと思います。

維新の会を協力体制に取り込みつつ、離反に備えて国民民主党にも配慮し、103万円の壁を160万円まで引き上げ、さらに178万円の壁も事実上なくしてしまった。その大胆さに、他の党に配慮し過ぎるなという印象を持ちました。

このような大盤振る舞いは、一見すると国民にとって非常に良い政策に見えますが、時間が経って振り返るとどうなのか、疑問も残ります。朝三暮四が思い起

こされます。

朝三暮四は、猿に木の実を与える際、最初に朝は三つあげると伝えたところ、少ないと不満の声が上がりました。そこで飼い主は、朝は四つにしましょうと言い、これを聞いた猿たちは、朝にもらえる数が一つ増えたことに大喜びします。

ところが、小さな声でその代わり、夜は三つにすると付け加えます。結果として、一日全体でもらえる数は変わっていないにもかかわらず、朝は増えた印象だけが強く残るわけです。

これを現代に置き換えると、新聞の見出しには「朝は大盤振る舞い」と大きく書かれますが、記事の最後のほうに小さく「申し訳ないけれど、その分は別のところで調整があります」と記されている、という構図になります。結果として全体は変わらないのに、読む側は最初の印象だけで良くなつたと感じ易くなります。

私には、高市早苗さんの進めている政策が、朝三暮四のように見えてしましました。意図せずともそのように映ってしまう点が少し引っかかった、というのが正直なところです。

もう少し続けます。次に、車の暫定税率の廃止についてです。ガソリン価格が下がってきている中で、値下げ自体を悪いと言う人はいません。そのような目先だけで良いと感じる施策が、次々と打ち出されています。

例えば、企業が社員に対して支給する食事補助を非課税とし、その上限を3,500円から7,500円に引き上げる、あるいは子育て支援として、ひとり親の所得控除を3万円増やして38万円にするといった施策があります。一見すると良い話が並んでいます。

今年も終わりに近づいていますので、こうした政策を重ねていった結果、来年の今頃はどうなっているのか、という視点も必要です。ここ1、2か月は確かに良かったとしても、1年経った時に、どう評価できるのか。さらに3年後、5年後にどうなっているのかまで含めて考えることが大切です。

見た瞬間に良さそうだと思っても、全てが本当に良いとは限りません。年の終わりや初めには、少なくとも一年単位で物事を考える姿勢が必要だと思います。これが、高市早苗さんが進めている政策全体を見た上の、私の感想です。

もし気になる政策があれば、それを少しメモしておいて、半年後や一年後にど

う感じるかを振り返ってみる。そのような視点を持つことが大切だと、感じています。

今回見ていて、氣になった点がありました。それは「中所得者」という区分です。控除額を増やす関係で、具体的な金額を示さざるを得なかったのでしょうか、中所得者層を年収 665 万円までと明確に示していました。

これまで、中所得者が幾らなのかは、あまり明確にされていませんでした。以前は、年収 200 万円以下を貧困層、あるいは低所得者とする表現でしたが、最近では 200 万円以下の一部は中所得者層でもあるといった表現に変わってきています。中所得者の上限がどこなのかは、ほとんど示されていなかったのが、今回あっさりと 665 万円までが中所得者と出てきたことで、下限が 200 万円、上限が 665 万円という線引きが見えてきました。そうすると、666 万円以上は高所得者と言うのでしょうか。では富裕層の定義ですが、一説では金融資産 1 億円～5 億円未満となっています。

令和 8 年について

目先の話はこの辺りにして、令和 8 年の話に移りましょう。
来月以降に出てくる様々な動きを見ると、インフレはさらに加速していくと思われます。給料も多少は上がるでしょうが、インフレのスピードには追いつきません。物価は確実に上がり続け、円安もどこまで進むのか分からぬ状況です。

1 月から 3 月にかけては、物価はそれほど上がらないという見方もありますが、1 年を通して見れば、今年はインフレがかなり進んだという評価になるのではないかでしょうか。来年の今頃には、物価が上がったというより、インフレが加速した 1 年だったと振り返ることになると思います。

次に、ストライキです。どこかでストライキが始まると思います。60 年前の丙午の年を振り返ると、大学の授業料値上げ反対等をきっかけに、明治や早稲田を始め、各地でストライキが相次ぎました。その流れは学生だけでなく、社会人にも広がっていました。

こうした状況の中で、次第に治安も悪化していきました。さらに当時は、飛行機事故が相次ぎ、大きな事故が数か月おきに起き、事故調査を行った海上保安庁のヘリコプターまでが墜落するという出来事もありました。飛行機に乗るのが怖

いと言われた年でもあります。

このように、60年前の状況を重ね合わせて考えると、ストライキや治安の悪化、事故の増加が考えられるでしょう。

実際、ここ太田市でも、警察が通常ではなく厳戒態勢を敷いています。特に交通事故が急増しており、命に関わる事故が多いということです。そう考えると、来年の今頃には事故が多かった一年だったという話になっているかもしれません。

その結果、何が起きるかというと、あまりここにはいたくないという気持ちになる人が増えるでしょう。富裕層であれば、世界中どこにでも行けますから、少し日本から離れておこうと考える富裕層が次々に出てくると思います。最近になって急に富裕層と認定された、金融資産1億円以上の人たちも、何らかの行動を起こすでしょう。

そうなると、超富裕層だけでなく、一般の富裕層も含めて、自分の体を動かす、あるいは自分の持っている資産を他の国へ移しておこう、という動きになります。

なぜそのような行動を取るのかというと、何度もお話をしている昭和21年2月17日付の金融緊急措置令が、現実的なものとして迫ってきたと、肌で感じる人が増えてきたからです。

そうなると何度もお話をしていますが、政府が最初に行うのはお金に関する措置、つまり金融封鎖です。金融封鎖が行われると、手元にあるお金は使えなくなります。銀行に預けなさいと言われ、銀行に預けると、お金は引き出せなくなります。

お金が引き出せなくなった後、少し時間差はありますが、次に起きるのが没収です。ここで少し60年前の話に戻りますが、当時、丙午の年にこんな出来事がありました。政府が国民から接収したダイヤモンドを割安で販売しますと発表したところ、ダイヤモンドを求める人たちが大行列を作りました。

接収と書かれていますが、当時の記事を見る限り、実質的には二束三文に近い価格で最低限の支払いを行い、ダイヤモンドを没収していたのが実態と言えます。

ゴールドについてはGHQが取り上げました。企業や個人のところに出向き、ゴールドを持っていそうと思われる人は調べられ、見つかれば没収されました。もし取られないようにするなら、ゴールドの場合はコインが良いでしょう。延金になっているものは、全て取られてしまうと思った方がいいですね。

このように、まず金融封鎖が行われてお金が使えなくなり、その後暫くして、目ぼしい貴金属等は政府に没収される、という流れになりました。これは昭和21年2月17日以降、比較的短い期間の中で実際に起きたことです。ですから、十分に気をつけた方がいいでしょう。

そのうち皆さんのお手元にも年賀状が届くと思います。年賀状には、今年はこれまでにない出来事が起きる氣がする、ということを書きました。断言するのは良くないと思い、起きるだろうではなく、起きる氣がするという表現にしていますが、とにかく今まで経験したことのない何かが起きる、そう感じています。

合わせて、国外に知り合いや友人を持つこと、自給自足の土台をしっかりと作ること、食料を備蓄しておくこと、大切な人といつでも連絡が取れる状態にしておくことも書きました。何か起きた時には連絡が取りにくくなることが多いので、事前の準備が大切です。また、避難先についても、人災と自然災害の両方を想定して考えておきましょう。

来年は、これまで起きるかもしれないと言ってきた中でも、特に不穏な氣配を感じています。過去60年の流れと照らし合わせても、要注意の年だと思っています。その理由の一つが、高市早苗さんの「働いて・働いて・働いて・働いて、働いて参ります」という発言です。あの言葉や目つき、その裏にある姿勢を見ると、表では各国と笑顔で付き合いながらも、実際にはかなり厳しいことを進めていく可能性を感じます。

厳しい政策や、そう受け取られかねない発言があれば、その反発も大きくなりますし、それを中国が取り上げて各国に発信することで、日本要注意という空気が一気に広がる可能性もあります。来年は、こうした状況をどこまで笑顔で和らげ、改善できるか問われる年になると思います。

こうした政策を進めていくと、目先では大盤振る舞いをした余韻が一年程続くでしょう。そのため期待感は暫く残り、高市さんは少なくとも一年以上続投すると思います。

高市さんは、叩かれても叩かれても受け流し、跳ね返す強さがあります。その為、一年程度で辞めることは考えにくいと思っています。万が一のことがあれば別ですが、そうでない限り、長く続ける可能性が高いでしょう。

高市さんが政権を担い続けるとすれば、頭の中には日本は非常に大きな借金を抱えた国であり、これを何とかしなければならないという認識が、総理大臣として必ずある筈です。その借金をどうやって減らすのかというと、現実的には選択肢は二つしかありません。国が稼いで利益を出し、借金を返していく道か、ハイパーインフレを起こして借金を実質的に消す道です。

しかし、これほどの借金を抱えた国が、順調に稼いで返していくかというと、それは非常に難しいでしょう。そうなると、日本に残されているのはハイパーインフレという選択肢になります。これは徳政令の変形のようなもので、国民にとってはとてもなく厳しい状況です。最も困るのは、ハイパーインフレによって生活が圧迫される国民ということになります。

ということで、来年は意識的に、これまでお話ししてきたことが起きるかもしれないと考えて行動して戴きたいと思います。繰り返しますが、まずは自給自足をするための土台作りです。フレコンバッグでサツマイモを育ててみたところ、実験的ではありますが、思った以上に収穫がありました。

次に、食料の備蓄を今までより少し多めにしておくことです。特に缶詰は有効だと思います。実際に5~6年前の缶詰を食べてみましたが、問題なく食べられました。アメリカの備蓄用食品は、かなり時間が経っても大丈夫でした。食料備蓄と自給自足の土台作りは重要です。

それから、国外と連絡が取れるような準備もしておいた方がよいでしょう。何か起きた時に、大切な人とすぐに連絡が取れる体制を整えておくことが必要です。簡単な合図や暗号のような形でも、すぐ意思疎通ができる仕組みを考えておくと安心です。年初1月から2月頃に、こうした準備を進めておくと良いと思います。

本日はここまでにしたいと思います。少し不安に感じる内容もあったかもしれません、様々な問題を想定し、それを乗り越える準備をした人にとっては、良い年になる筈です。良い年にするかどうかは、自分次第ということが明確に表れる年もあります。

それでは、どうぞ良いお年をお迎え下さい。有難う御座居ました。